

中寺廃寺跡

平成 22 年度



2011年3月

まんのう町教育委員会



A) 中寺廃寺跡 全体 復元図 (東より)



B) A地区第2テラス仏堂跡・第3テラス塔跡 復元図 (南西より)

【題字】 金澤正親

【表紙】 B地区第1テラス割拵殿跡・第2テラス僧房跡 復元図

表紙・図版1 【監修】 山岸常人 【作図】 松本正己・国松えり

序 文

まんのう町教育委員会では、平成16年から古代の山林寺院跡である「中寺廃寺跡」の発掘調査を行っております。

平成20年3月28日に、「中寺廃寺跡」は、古代山林寺院として全国的に貴重な遺跡であるとして、国指定史跡となりました。

平成20年度までに、A地区では菜園場跡・仏堂跡・塔跡・大炊屋跡、B地区では仏堂もしくは割拌殿であった礎石建物跡・僧房跡、C地区では石組造構を確認しています。A地区は仏堂と塔が計画的に配置された中枢伽藍が存在する中心的な地区、B地区は中寺において、最も早い時期より大川山信仰に根差す活動が始まった地区、C地区は平安時代における民間信仰の痕跡が残る地区と考えられます。

平成22年度は、A地区第11テラス、A-B地区間連絡道、B地区第3テラス西側斜面について、遺構の確認を目的とした試掘調査を実施しました。

A地区では、これまで確認されたもの以外に関連する遺構を確認するために広範囲に踏査し、平坦地を確認してトレンチ調査を行いましたが、関連する遺構は確認できませんでした。遺物は石鎚、サヌカイトの剥片が出土しました。

また、大川神社やC地区との連絡道を確認するために、A地区・B地区間の、連絡道のトレンチ調査をしましたが、明確な道の遺構は確認できませんでした。遺物は須恵器片・土師器片が出土しました。

B地区では、斜面部にトレンチを設定し、その状況を確認しましたが、明確な遺構は確認できませんでした。遺物は須恵器・土師器が出土しました。

なお、平成23年度から、史跡中寺廃寺跡整備検討委員会の丹羽佑一委員長様をはじめ委員の皆様方のご指導を得ながら作成した整備計画に基づき、史跡内の本格的な整備を実施する予定です。

このたび多くの方々のご高配とご尽力により、「中寺廃寺跡」の調査報告書第8集を発刊する運びとなりました。本報告書が、古代山林仏教の研究資料として広く活用されますとともに、文化財に対する理解と关心が一層深められることになれば幸いです。

最後になりましたが、本発掘調査に格別のご指導とご協力をいただいております関係の皆様方に心から深く感謝申し上げますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げ、序文に代えさせていただきます。

平成23年3月

まんのう町教育委員会

教育長 北山正道

例　　言

1. 本報告書は、まんのう町教育委員会が、文化庁と香川県の文化財補助金を受けて平成22年度国庫補助事業として実施した、香川県仲多度郡まんのう町造田3469-2他に所在する中寺廃寺跡の報告を取録した。
2. 発掘調査及び報告書の作成はまんのう町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び報告書の作成にあたって、以下の方々のご教示、また関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)
上原真人、小野秀幸、片桐孝浩、鈴木信男、内藤　栄、丹羽佑一、平澤　毅、森下英治、
山岸常人、香川県教育委員会生涯学習・文化財課、香川県埋蔵文化財センター、
まんのう町文化財保護協会
4. 本報告書で用いる方位の北は、旧国上座標第IV系の北であり、標高は東京湾平均海水位(T.P.)を基準としている。
また、遺構は下記の略号により表示している。
S B…撲立柱建物跡 S D…溝跡 S P…柱穴跡
5. 採図の一部に国土地理院国基本図(1/5,000)を複製した琴南町全図(承認番号四被第238号)及び、国土地理院地形図「内田」(1/25,000)を使用した。
6. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財团法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖 1994年度版」による。

目 次

1. 立地と環境.....	1
2. 調査の経緯と経過.....	1
3. 周知と活用.....	5
4. 調査の成果.....	6
(1) 遺構.....	6
①A 地区第11テラス.....	11
②A - B 地区間連絡道.....	14
③B 地区第3 テラス.....	14
(2) 遺物.....	16
①B 地区.....	16
②A - B 地区間連絡道.....	18
(3) まとめ.....	18

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図.....	2
第2図 平坦地分布図.....	3
第3図 A地区全体図.....	7
第4図 A地区第11テラス トレンチ配置図	8
第5図 A地区第11テラス トレンチ2断面図	9
第6図 A - B 地区間連絡道 トレンチ配置図	12
第7図 A - B 地区間連絡道 トレンチ断面図	13
第8図 B地区第3 テラス トレンチ配置図	15
第9図 遺物実測図.....	17

表 目 次

第1表 土器観察表.....	19
----------------	----

写 真 図 版 目 次

- 図版1 A) 中寺廃寺跡 全体 復元図（東より）
B) A地区第2テラス 仏堂跡・第3テラス 塔跡 復元図（南西より）
- 図版2 A) 中寺廃寺跡 全景（東より）
B) A地区第11テラス トレンチ2 掘削前状況（東より）
- 図版3 A) A地区第11テラス トレンチ2 土層断面 1/4（南東より）
B) A地区第11テラス トレンチ2 上層断面 2/4（南東より）
- 図版4 A) A地区第11テラス トレンチ2 土層断面 3/4（南東より）
B) A地区第11テラス トレンチ2 土層断面 4/4（南東より）
- 図版5 A) A-B地区間連絡道 トレンチ1 土層断面 1/2（南東より）
B) A-B地区間連絡道 トレンチ1 土層断面 2/2（南東より）
- 図版6 A) A-B地区間連絡道 トレンチ1 SK01 土層断面（東より）
B) A-B地区間連絡道 トレンチ2 掘削前状況（北より）
- 図版7 A) A-B地区間連絡道 トレンチ2 土層断面（北より）
B) A-B地区間連絡道 トレンチ2 上層断面（南東より）
- 図版8 A) B地区第3テラス 完掘状況（北東より）
B) B地区第3テラス 完掘状況（南西より）
- 図版9 出土遺物 報文番号1~19・21~30 外面
- 図版10 出土遺物 報文番号1~19・21~30 内面
- 図版11 出土遺物 報文番号20

1. 立地と環境

史跡中寺廃寺跡が所在するまんのう町は、平成18年3月20日に香川県仲多度郡南部の3町（琴南町・満濃町・仲南町）が合併して誕生した町である。香川県中部（中讃）に位置し、東は綾川町・高松市、西は三豊市、北は丸亀市・普通寺市・琴平町、南は徳島県美馬市・三好市・東みよし町に接している。町の面積は194.33km²、人口は約2万人である。町の南部及び南西部には、標高1,000mを超える竜王山（1059.9m）、大川山（1042.9m）を主峰とする讃岐山脈が連なり、その麓を県下で唯一の一級河川土器川が北流している。土器川を源り、讃岐山脈の分水嶺となる三頭峠まで登り詰めると、切り立つように急峻な眼下に、東に向けて滔々と流れる吉野川を望むことができる。対岸には剣山を擁する四国山地の山並が続く。

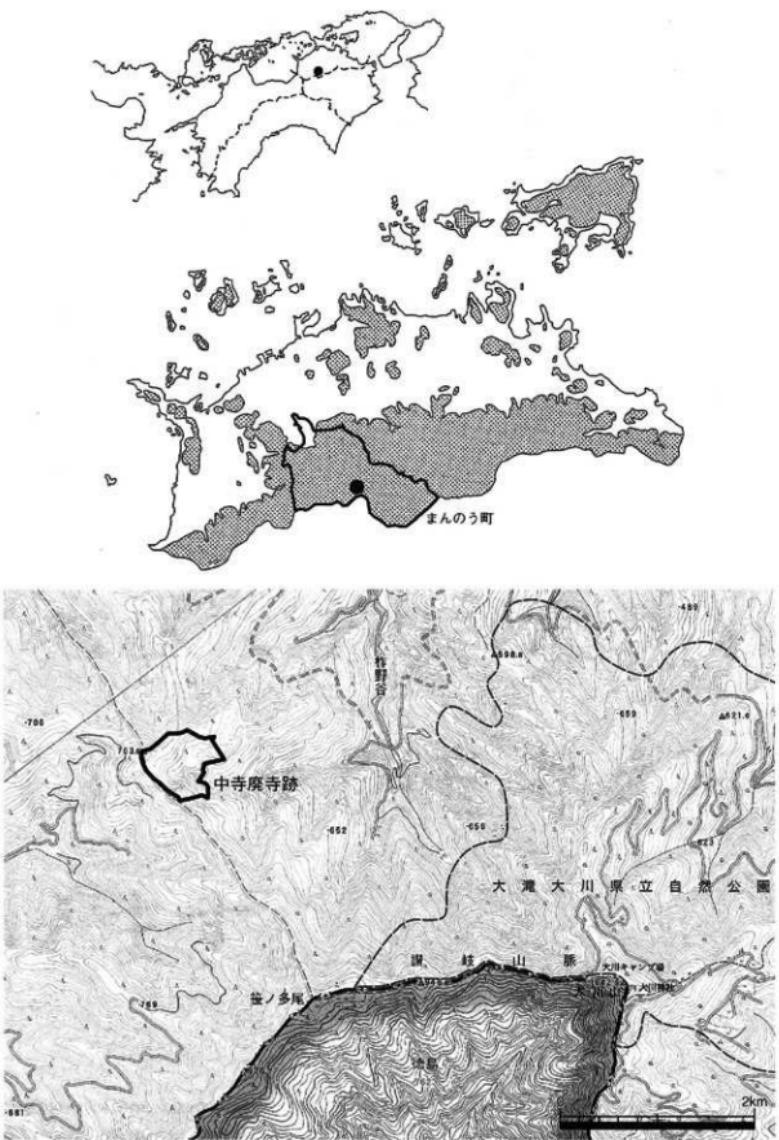
まんのう町には、古くから讃岐・阿波間を結ぶ峠越えの道が数多く通っている。こういった峠越えの道は先史時代より存在していたと考えられ、これらの道が古代には官道として、中世には修験道者たちの道や軍用道として、近世には金毘羅街道として整えられ、讃岐山脈を挟む南北地域間の交流に利用されてきた。中でも三頭峠は、金毘羅五街道の内の一筋、阿波街道であり、近代まで通行量の多い道であった。現在では、猪ノ鼻トンネル・三頭トンネルが香川・徳島間の主要な往還となっている。

史跡中寺廃寺跡は、香川県と徳島県を分かつ讃岐山脈第2の主峰、大川山の香川側山麓部に位置する。大川山頂より西北西約2.5km、標高約700mの地点に、小尾根から東南東へ開けた谷があり、この谷を埋む東西400m、南北500mの範囲に分布するテラスが史跡中寺廃寺跡である。テラス群は分布状況から、標高が最も高く谷部に位置するA地区、谷の北側に位置するB地区、B地区と谷を挟んで向かい合うC地区の3地区に大きく分けられる。史跡指定面積は187,713.16m²である。これら3地区は、現在では樹木が生い茂り見通しが悪いが、谷を隔ててお互いを見通すことが可能である。尾根上のテラスからは、ほぼ香川県全域を見渡すことができる。山腹のテラスからは、尾根に遮られるため遠望することはできないが、B地区南東方向の視界は大きく開けており、古くから信仰されてきた大川山を望むことができる。

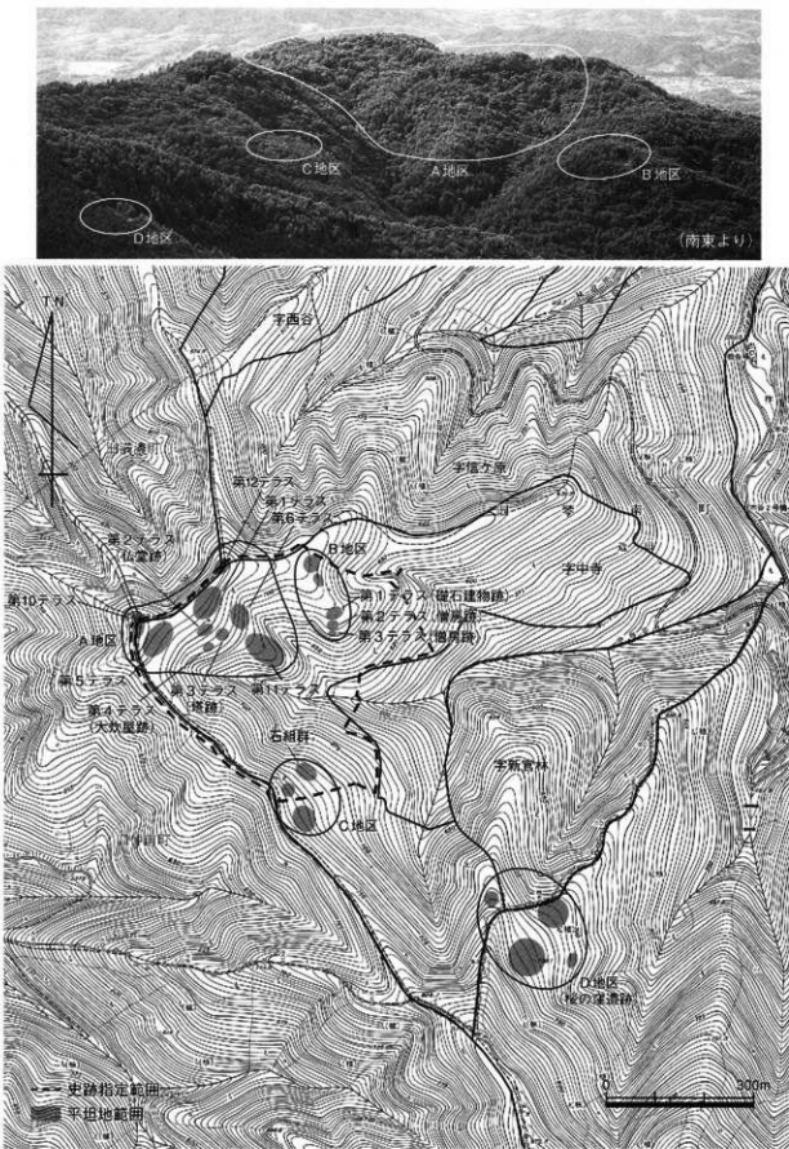
現在、中寺廃寺跡へは大川山麓の集落である中通、江畑、柞野から至る。中通からは途中、大川神社参拝道を通る。大川山頂や途中の讃岐山脈尾根筋からは、北に日本最大の灌漑用ため池である満濃池をはじめとするため池群が潤す讃岐平野を、南に四国山地の雄大な広がりを一望できる。江畑、柞野から至る道は、古来より大川神社参拝道、金毘羅参拝道として、また地元住民の生活道として炭焼き、林業に利用してきた。これらの道は麓では前述の街道へと至り、奥では峠越の道へと至る。

2. 調査の経緯と経過

調査地付近に「中寺」「信が原」「鐘が窪」「松地谷」といった寺院に関する地名が存在すること、



第1図 遺跡位置図



第2図 平坦地分布図

寛政11（1799）年に記された『譜岐廻遊記』中に「中寺」の表記があること、近隣集落には大川七坊と呼ばれる寺院が山中に存在したという伝承が残っていることから、近年、寺院の存在が示唆されてきた。しかし、寺院の詳細が記された文献は未確認であり、永らく幻の寺院であった。

昭和56年度

中寺廻跡付近の分布調査を実施し、現在のA地区（第2図参照）付近において数箇所の平坦地を発見した。

昭和59年度

ボーリング棒による調査を実施し、A地区第2テラスで礎石を確認した。またA地区第3テラスにおいて試掘調査を実施し、塔跡を確認した。塔心礎石の下部からは地鎖・鎖壙具と想定される10世紀前半の遺物が出土し、10世紀前半に塔が建立されたことが分かった。

平成15年度

字中寺（第2図）全域の詳細分布調査を実施し、遺跡が約1kmの範囲に展開していることを確認した。この範囲を大きく4つの地区に分け、それぞれをA～D地区とした。

平成16年度

中寺廻跡調査・整備委員会を組織し、長期計画に基づき本格的な調査を実施した。平成16年度はA地区第2・第3テラスにおいて発掘調査を実施し、仏堂跡・塔跡を確認した。これら仏堂と塔は計画的に配置された中枢伽藍であり、A地区は中寺の中心的な地区であったと考えられる。また、文献調査により、寺は19世紀前半にはすでに名称不明の状態にあり、現在のD地区付近における寺跡の存在が伝承されていたことがわかった。

平成17年度

B地区（第2図）において発掘調査を実施し、礎石建物跡（仏堂もしくは別拝殿）・僧房跡を確認した。僧房跡より西播磨産須恵器多口瓶片、僧房跡に伴う排水溝より越州窯系青磁碗片が出土したことから、中寺はこれらの貴重品を取り寄せることのできる有力な寺院であったと考えられる。

平成18年度

C地区（第2図）において発掘調査を実施し、石組造構を確認した。平安時代に記された仏教行事に関する史料『三宝絵詞』に、平安時代中頃には石を積んで石塔とする行為が一般の民衆に広がっていたという記述があることから、石組造構は平安時代の石塔であると思われ、祭祀的な意味合いの強い地区であると考えられる。

平成19年度

A地区第4テラスにおいて発掘調査を実施し、大炊屋跡を確認した。大炊屋跡では、薬窓跡を検出し、多様の食器・調理具類が出土している。平成20年3月28日、国の史跡に指定された。

平成20年度

B地区第1・第2テラスにおいて発掘調査を実施し、第1テラスでは礎石建物跡に付随する礎

石据付掘方跡、溝跡を確認した。第2テラスではテラス中央に南北に走る排水溝を挟み、東西にそれぞれ1棟ずつ配された僧房跡を確認した。流上層より佐波理加盤と考えられる金属器片が出土した。

平成21年度

A地区第12テラス、B地区第2・第3テラスにおいて発掘調査を実施した。平成17年度の調査成果も含めて概観したところ、B地区第3テラスは、テラス中央1棟のみの建物配置であることがわかった。またB地区より8世紀後半、9世紀後半～10世紀前半の遺物が特に多く出土していることから、中寺廃寺の中で最初に営まれた地区であると考えられる。B地区第3テラスより古密教の様相を呈する銅錦杖頭、銅三鈷杵が出土した。

本年度

現地作業は4月21日から11月30日まで、A地区第11テラス、A-B地区間連絡道、B地区第3テラス西側斜面において実施した。A地区第11テラスについては、遺構の確認を目的とした試掘調査を実施した。A-B地区間連絡道については、A-B地区を結ぶ道の確認のため試掘調査を実施した。B地区第3テラス西側斜面については、第3テラス調査区を延長し、テラスの切岸を確認するため試掘調査を実施した。埋め戻しについては、掘削して検出した最低面に砂を散布し、その上に発掘作業で掘り上げた土を埋め戻した。

整理作業は発掘調査と並行して行い、発掘調査終了後には報告書編集作業を行った。

3. 周知と活用

中寺廃寺跡の周知と活用を図るために、現地見学、講演会、資料展示を実施した。また、外部団体からの見学・講演依頼に講師派遣を実施している。琴南ふるさと資料館では常設展示を行っている。

活動実績

4月24日	中寺廃寺跡現地見学 一般希望者	6名
6月19日	文化財保護協会琴南支部総会講演「中寺廃寺跡について」	25名
7月24日	まんのう町婦人会総会講演「中寺廃寺跡について」	65名
8月8日	中寺廃寺跡現地見学 一般希望者	9名
11月6・7日	琴南地区文化祭にて琴南ふるさと資料館開放	
11月20・21日	まんのう町文化祭にて展示	
11月26日	中寺廃寺跡現地見学 まんのう町婦人会役員	7名
11月27日～12月23日	発掘された日本列島&香川の発掘最前線山展	

活動の様子



11月17・18日 琴平中学校職場体験学習



11月20・21日 まんのう町文化祭



11月27日～12月23日
発掘された日本列島展 & 香川の発掘最前線

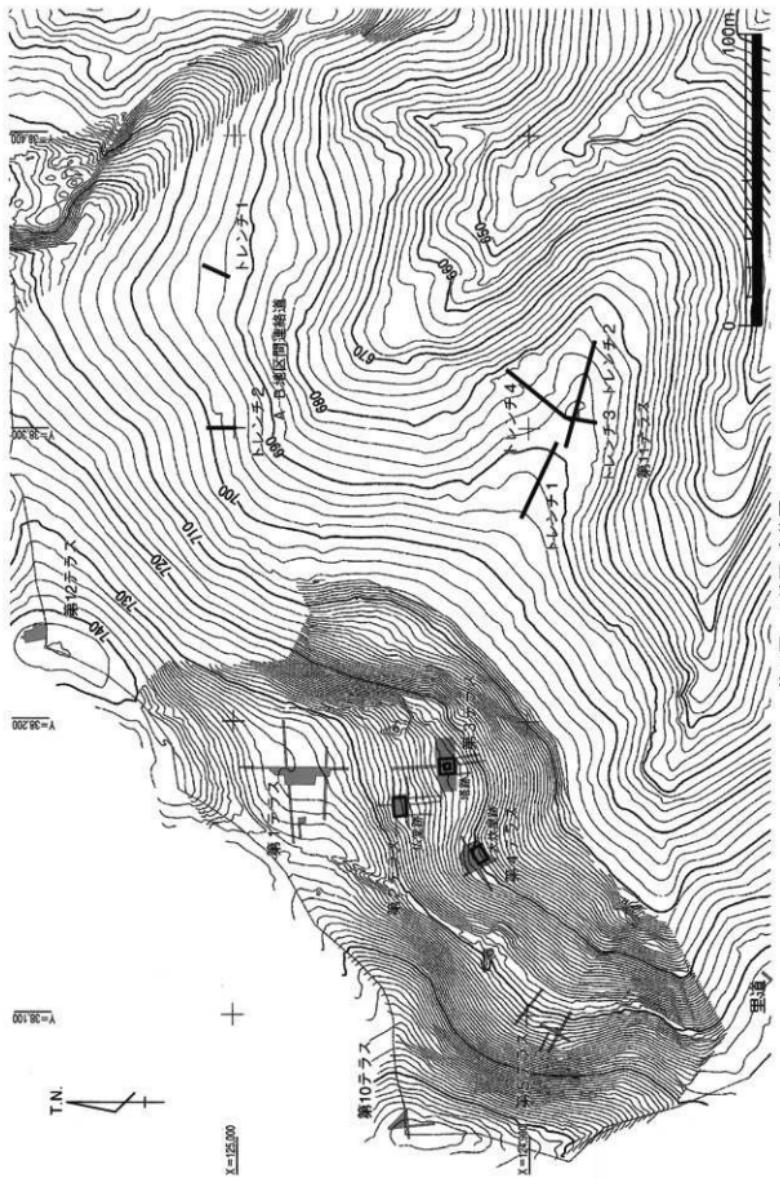
4. 調査の成果

(1) 遺構

本年度の発掘調査は、A地区第11テラス、A-B地区間連絡道、B地区第3テラス西側斜面において実施した。

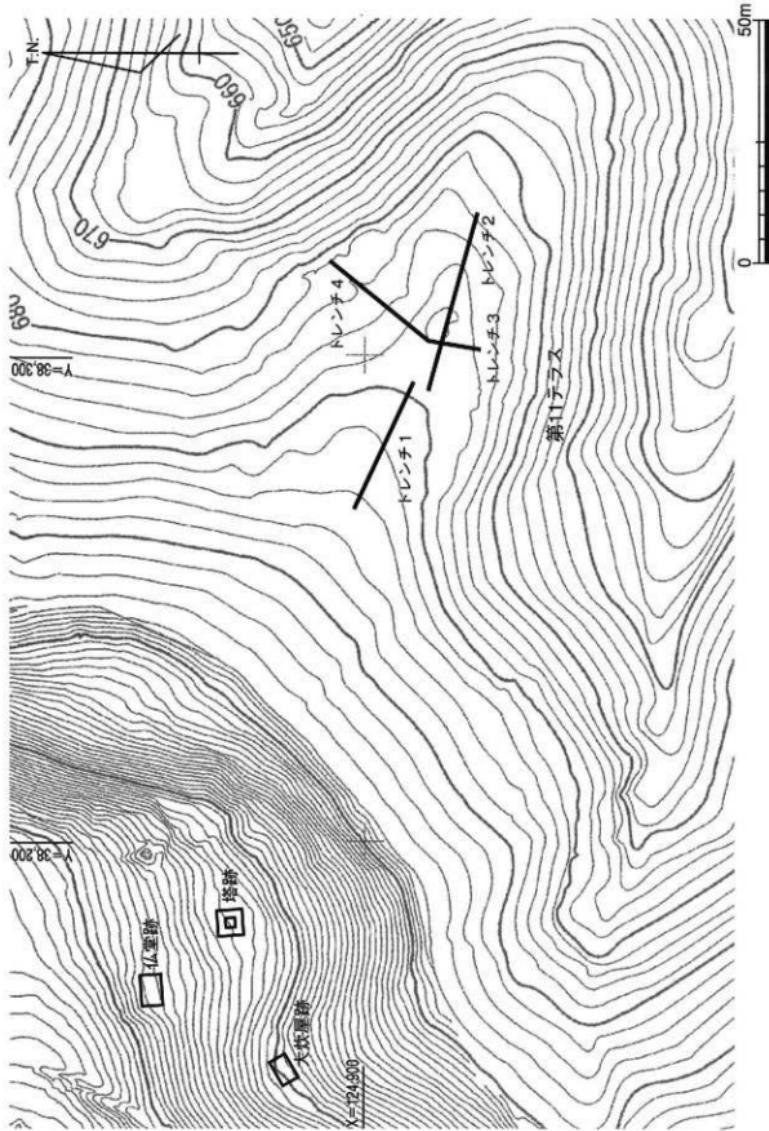
A地区は、史跡中寺廃寺跡の中央部、標高約753m～680mに位置する全12か所のテラス群で、史跡範囲南東端の三角点から南東側面に分布する。テラスは、尾根の頂上に位置するテラスを除けば、全てが尾根を背にし、谷に向かって開く形状で広がる。第1テラスで菜園場跡、第2テラスで仏堂跡、第3テラスで塔跡、第4テラスで大炊屋跡を確認している。A地区第11テラスには纏まった面積の平坦面があることから、遺構の存在を疑い、テラス中央部を直交するトレッチを設定し掘削調査を行った。概ね平坦部では流土が厚く堆積し、遺構は検出されなかった。

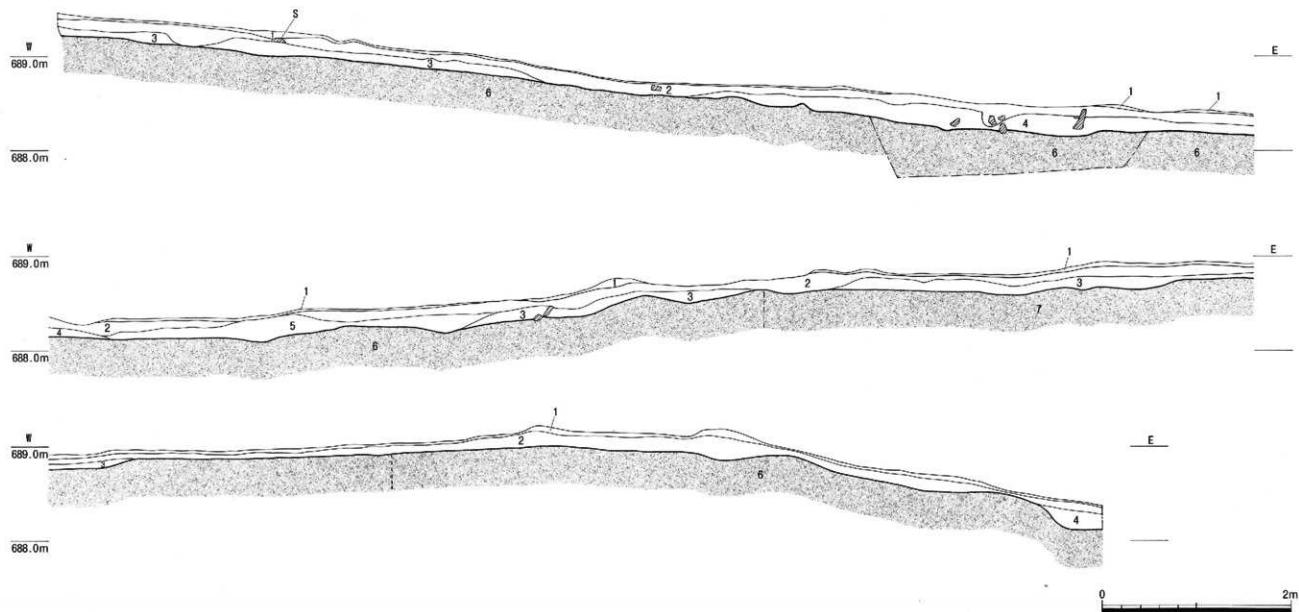
A-B地区間は、現在、雑木林となっており、発掘調査のために任意で敷設した作業道が通っている。各地区を結ぶ道は未だ不明であることから、本年度、A-B地区間連絡道の確認のため、踏査を実施した。踏査の結果、現在の作業道付近に中寺廃寺の連絡道も存在した可能性があり、



第3図 A地区全体図

第4図 A地区第11テラス トレンチ配置図





1. 廉棄土
2. 黄褐色砂質土（腐植土）
3. 明黄褐色粘質土（灰白色劣化化石多く含む）
4. 明黄褐色粘質土（灰少し含む、灰白色劣化化石多く含む）
5. 明黄褐色砂質土（粒径 5cm 以下の石含む）
6. 黄褐色砂（灰白色劣化化石、地山）
7. 淡黄褐色粘質土（灰白色劣化化石含む、地山）

第5図 A地区第11テラス トレンチ2 断面図

試掘調査を実施した。道の幅員と見られる平坦面およびテラスとして利用した可能性のある平坦面を検出した。

B地区は、史跡中寺廃寺跡の北東部、標高約689.0mに位置する全5か所のテラス群で、第1～第3テラスが南西方向へ突出した小尾根の先端付近に展開している。テラスの周囲は概ね急斜面であるが、第1テラスの北東部と北西部は緩やかな尾根が続いている。第1・第2テラス間の比高差は約4m、第2・第3テラス間の比高差も約4mである。第1テラスで仏堂もしくは割拝殿の可能性がある礎石建物跡、第2テラスで僧房跡を確認している。昨年度までの調査で、第2テラス、第3テラスより播磨産須恵器多口瓶、越州窯系青磁碗、佐波理加盤、軒丸瓦、銅錫杖頭、銅三鉢杵といった希少な遺物が多く出土している。B地区第3テラス西側斜面では、テラスの切岸を確認するため試掘調査を実施したところ、概ね薄く流土が堆積し、遺構は検出されなかった。

①A地区第11テラス

A地区第11テラスは、第6テラス南東の谷と谷に挟まれた尾根上に位置する。標高約690m、面積約1,660m²で、A地区的主なテラスからは約35m下り最も低いテラスである。平坦面は南東に延びる尾根上の南半と尾根を背に北東の谷に向かって広がる北半に大きく分けられる。水平に北へ進行するとB地区第1テラスに至り、広い平坦面を持つことから遺構の存在を考え、トレントを4本設定し掘削調査を実施した。

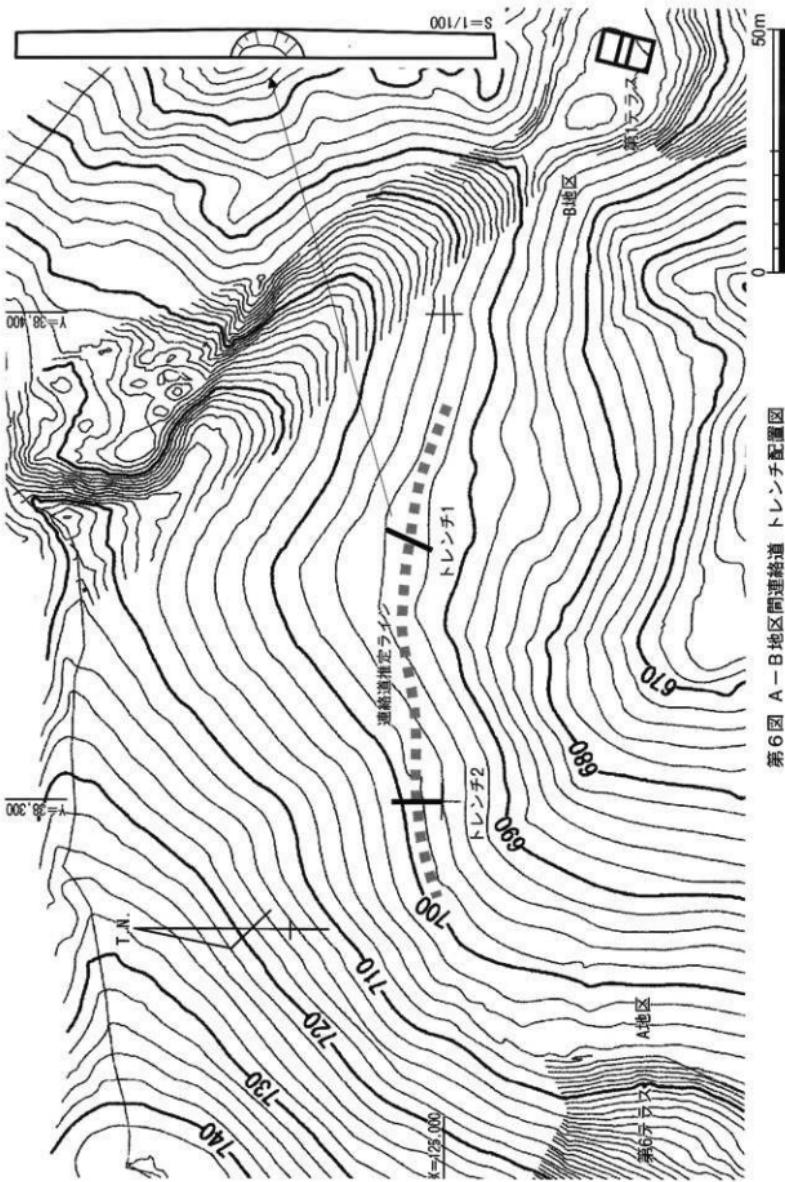
トレント1は、南半平坦面中央部標高689.49mから尾根筋に沿って尾根中央部標高694.56m（南東～北西）に設定し、幅50cmを掘削した。腐葉土層、腐植土層、流土層から成り、平坦面の造成痕、遺構面は検出されなかった。トレント全体にかけて尾根筋と同じ傾斜で腐葉土層、腐植土層、流土層が堆積し、南半平坦面近くで流土層は厚みを増し水平堆積する。腐葉土・腐植土層は20～30cm、流土層は主に黄褐色砂質土～黄橙色砂質土で25cm～40cm堆積している。地山は主に黄橙色粘質土～明黄褐色粘質土で繊維多く含み、南半平坦面付近では一部礫層も確認できる。

トレント2は、トレント1の南東端付近から尾根筋が変化することから、南半平坦面中央部標高689.45mから尾根中央部標高682.24m（西～東）に設定し、幅50cmを掘削した。トレント1と同様の上層序傾向で、南半平坦面の地山は礫層が連続している。

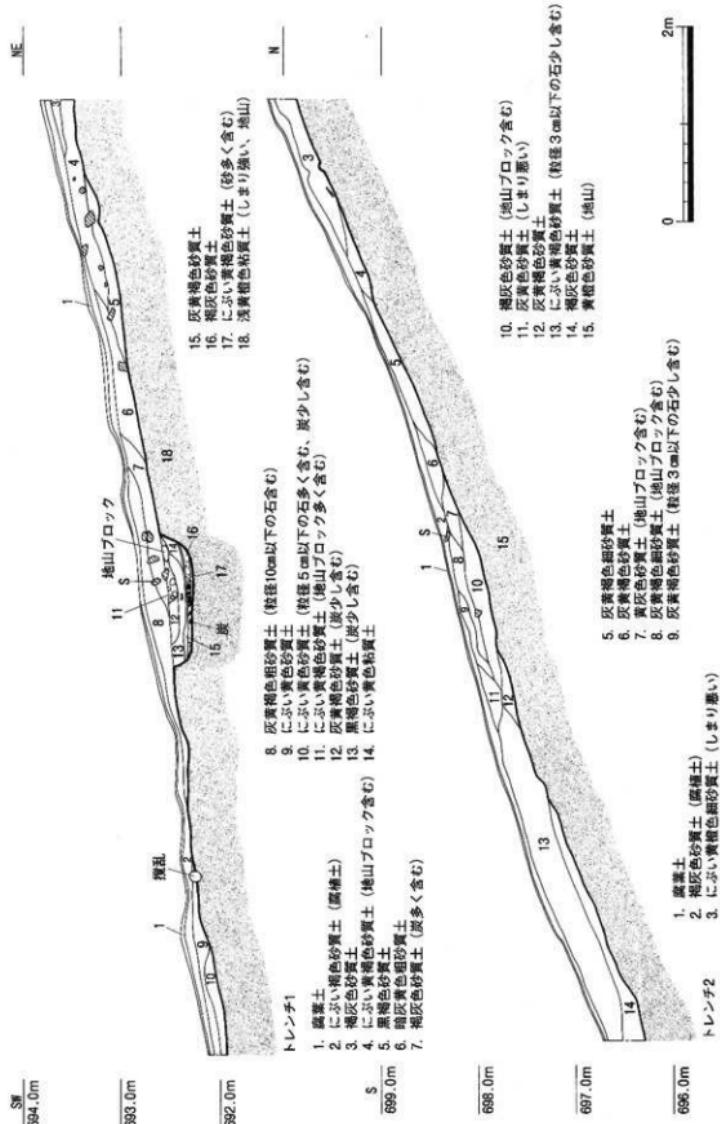
トレント3は、南半平坦面斜面標高687.50mから標高688.29m（北～南）に設定し、幅50cmを掘削した。トレント1と同様の土層序傾向で、トレント南端より約3mで南半平坦面の傾斜が始まる。トレント2との交点付近では和泉砂岩群を検出している。

トレント4は、南半平坦面中央部標高688.29mから北半平坦面の傾斜変化点まで標高682.24m（南西～北東）に設定し、幅50cmを掘削した。トレント1と同様の土層序傾向であるが、流土層が平均して5cm程度厚く堆積している。

第6図 A-B地区間連絡道 トレーニング配置図



第7図 A-B地区間連絡道 レンチ断面図



②A-B地区間連絡道

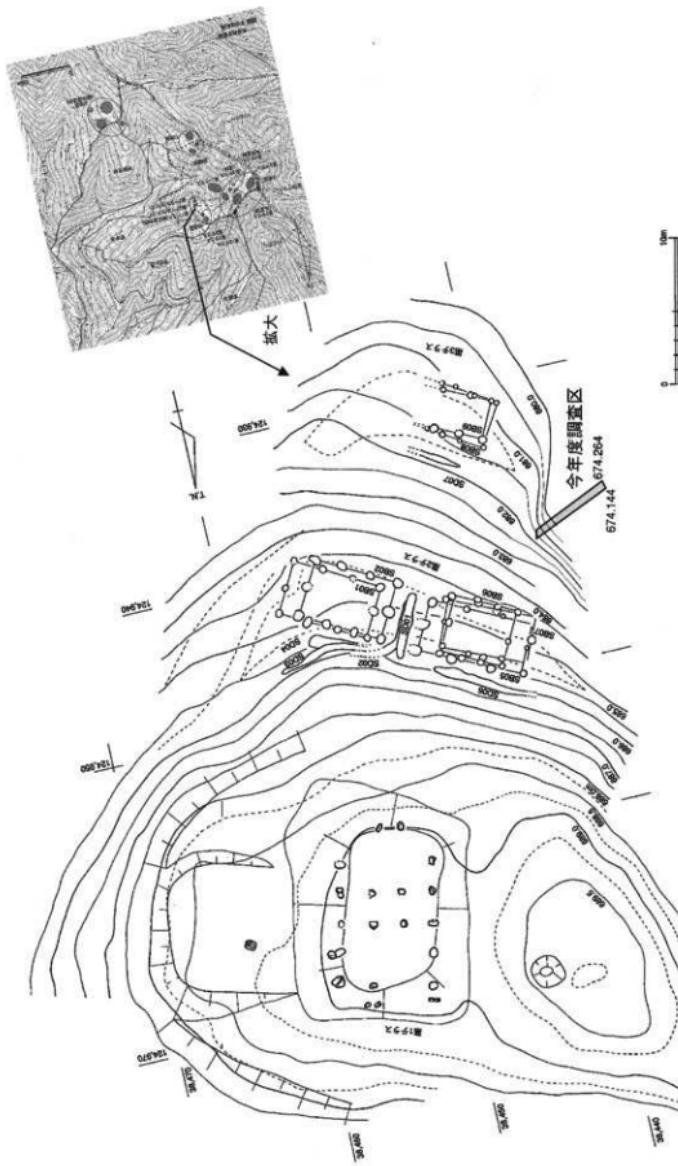
A-B地区間では連絡道確認のため、最初にA地区第6・第11テラスからB地区西側斜面にかけて標高670m~710m間の踏査を実施した。傾斜角の変化点、平坦面の分布を調査したところ、現在敷設している作業道付近に古道の存在が推定された。そこで2地点において $10 \times 0.5\text{m}$ の掘削調査を実施した。

トレンチ1は、尾根を背にして南の谷に向かって緩やかに下る地点の中央部に設定した。北から南への傾斜方向がトレンチ1付近で変化している。上層は大きく2層から成り、腐葉土・腐植土層が約5~10cm、流土層が約10~30cm堆積している。上師器、須恵器が数点出土した。トレンチ中央部で、底部に炭化物含有層をもつ土坑を検出したが遺物は出土していない。尾根を背にした地形であること、トレンチ内から遺物が出土し、土坑北辺から南へ約3mの平坦面が続くこと、トレンチの北西部・南部も傾斜が緩やかで平坦面と推測される地形が存在することなどから、トレンチ1周辺はテラスとして利用されていた可能性が考えられる。

トレンチ2は、南の谷に向かって急な傾斜が続く途中に設定した。傾斜角の微妙な変化が見受けられる地点で、A地区第6テラスからB地区第1テラスに向かって敷設している作業道の途中である。土層は、腐葉土層、腐植土層、流土層、盛土層から成る。流土層はトレンチの両端、盛土層はトレンチ中央部の傾斜角変化点で数層認められる。トレンチ中央部の傾斜角変化点では、山側斜面を掘削し、谷側に盛土することで造成された平坦面が認められる。造成は数回行われていて、これらの平坦面が連絡道路と考えられるが、遺物は出土していないことから利用時期は不明である。

③B地区第3テラス

B地区第3テラスは平成17年度、平成21年度に発掘調査を実施している。本年度は、平成21年度の調査で、軒丸瓦、石帯、銅錫杖頭、銅三鉛杵といった特異な様相を示す遺物が集中的に出土している調査区北西端の拡張部約10mより以西において、テラスの切岸を確認するためトレンチ調査を実施した。平成21年度調査区拡張部北西辺から第3テラス西側の谷に向かって、傾斜に直交するトレンチ(6×1m)を掘削した。傾斜はトレンチ東端から西へ約1mまでが約15度、約1m付近から40度以上の急激な下りとなり、約3m付近で10~20度と緩やかになっている。堆積層は腐葉土層、腐植土層、流土層から成り、流土層直下に灰白色劣化石を多く含む浅黄褐色粘質土の地山が広がる。掘削前は雜木林であったため腐葉土が厚く堆積していた。流土層は明黄褐色細砂質土で、トレンチ東端が厚く約40cm、西端が約3cmで標高の低い方へ薄くなっている。遺構は検出されなかった。遺物の出土位置はトレンチ東端の流土層中に集中している。



第8図 B地区第3テラストレンチ配置図

(2) 遺物

A地区塔跡を検出した第3テラスから南東方向に延びる尾根上に平坦地を確認し、A地区第11テラスとした。この第11テラスには尾根筋にトレンチ1・2を、直交するようにトレンチ3・4を設定した。調査の結果、トレンチから遺構は確認できず、遺物も石礫、サスカイトの剥片少量が出土したのみである。石礫は縄文時代と思われる小型のものである。

A地区とB地区間の連絡道を確認するために、事前に踏査し、現地形で僅かに痕跡が確認できる部分にトレンチ1・2を設定した。トレンチから須恵器片・土師器片が少量の遺物が出土した。

B地区では今年度新たに第3テラス西側斜面に切岸の状況を確認するためにトレンチを設定した。堆積状況は斜面部であるために、流土のみであった。遺物は第2・第3テラスで出土した遺物と同様に土師器壺、黒色土器碗、須恵器壺、土師質土釜を中心に出土している。時期は8世紀末～10世紀前半のもので、特に9世紀後半～10世紀前半の土師器壺、須恵器壺が主として出土している。

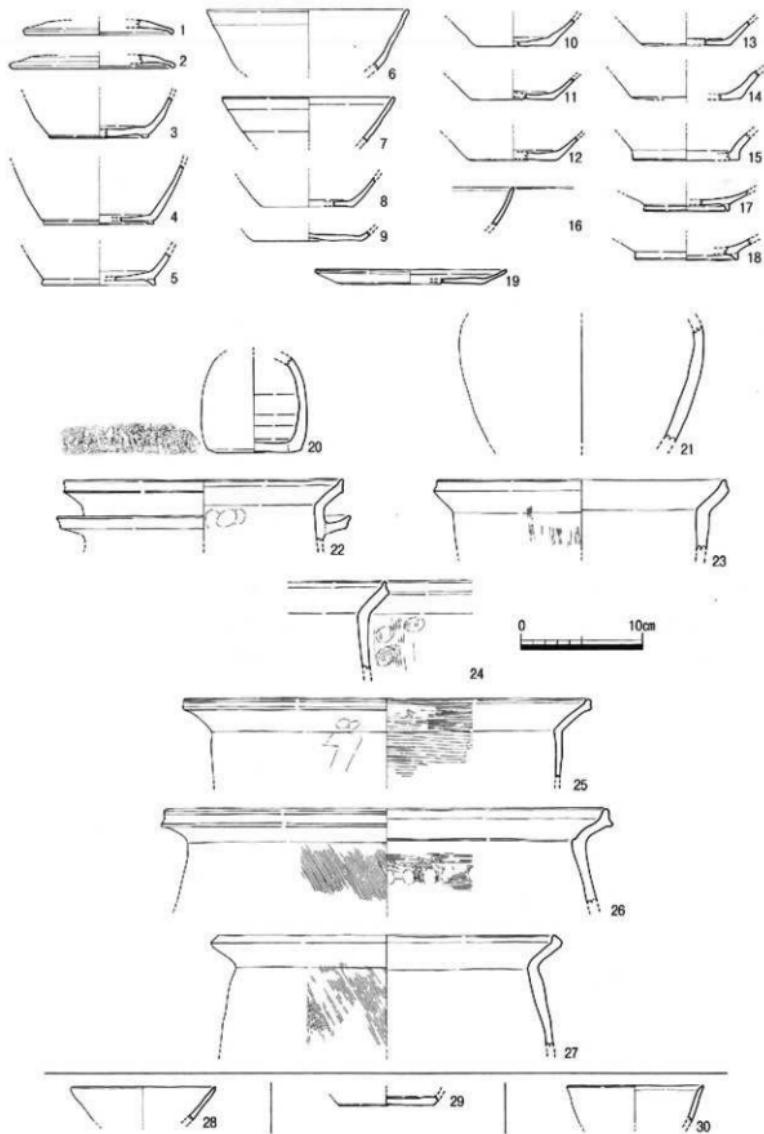
①B地区

1～27はB地区第3テラス西側斜面から出土した遺物である。

1・2は須恵器壺蓋で、端部が短く下方に屈曲し、断面は三角形状を呈する。器高はあまり高くなく、天井部は平で、宝珠が付くものと思われる。3～5は須恵器高台付壺である。3・4の高台は断面方形で、底部の端、底部と体部の境に付く。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。5は底部と体部の境に外方に踏ん張るように端部に丸みを帯びた高台が付きく。焼成は軟質で、灰白色を呈する。6～9は須恵器壺で、ヘラ切りされた底部から体部は直線的に外上方に延びる。10～14は土師器壺で、ヘラ切りされた底部から体部は直線的に外上方に延びる。須恵器壺と調整・形態はほぼ同じで、焼成のみが違うことが解る。15は突出する底部を持つ円盤状高台の土師器壺である。16～18は内面のみ黒色処理された黒色土器A類碗である。平底の底部から体部は緩やかな内湾しながら外上方に延びる。口縁端部内面には僅かに沈線状の窪みが認められる。19は土師器皿である。底部はヘラ切りされ、体部は直線的に外上方に延びる。20は須恵器壺である。小型のもので、底部は未調整、体部最下端に叩き状の痕跡が確認できる。21は壺の体部である。22は鍔付きの土師質長胴壺である。鍔の端部と口縁端部は、同じように上方に丸く摘み出している。23～27は土師質長胴壺である。23～25は体部がほぼ直ぐ下方に延びるが、26・27はやや丸みを持ち、延びる。体部内外面には刷毛目が施されている。

B地区第3テラス西側斜面から出土した遺物は、須恵器壺、土師器壺、黒色土器などが出土しており、時期は8世紀末～9世紀前半の1～4が古く、10世紀前半の須恵器壺、土師器壺、黒色土器碗が最も新しい。

28はB地区第1テラス流土層から出土した遺物である。須恵器壺で、体部は直線的に外上方に



第9図 遺物実測図

延びる。時期は9世紀後半である。

29はB地区第3テラス西側斜面埋め戻し土から出土した遺物である。須恵器坏で、底部はヘラ切りされている。

②A-B地区間連絡道

30はA地区からB地区への連絡道を確認するために設定したトレンチから出土した遺物である。須恵器坏で、体部はやや内湾気味に外上方に延び、口縁端部をやや外反させ、細く終わらせる。B地区第3テラス西側斜面から出土した須恵器坏に比べると、体部の傾斜はきつい。

このトレンチでは遺物が8点出土している。時期は9世紀前半である。

(3)まとめ

これまでの調査で、A地区は仏堂跡、塔跡を中心とし、大炊屋跡が付属していたことがわかつている。A地区ではこれ以外に関連する造構を確認するために広範囲に踏査し、平坦地を確認してトレンチ調査を行ったが、関連する遺構は確認できなかった。A地区は仏堂跡、塔跡、大炊屋跡を中心として、他の造構はなかった可能性が考えられる。

また、大川神社やC地区との連絡道を確認するために、現在古道となっている部分も含め、可能性のある部分について、連絡道を確認するためのトレンチを設定し、調査している。今年度実施したA地区・B地区間の連絡道のトレンチ調査では、明確な道の造構は確認できなかった。A・B地区間にはかなり急斜面になっている部分もあり、流されたものか、あるいは尾根筋に連絡道があった可能性も考えられる。

B地区では第1～3テラスを確認し、ほぼテラスごとの造構は判明している。今年度はテラスの切岸を確認するために斜面部にトレンチを設定し、その状況を確認したが、明確な造構は確認できなかった。

参考文献

「まんのう町内遺跡発掘調査報告書 第7集 中寺庵寺跡 平成21年度」まんのう町教育委員会 2010年

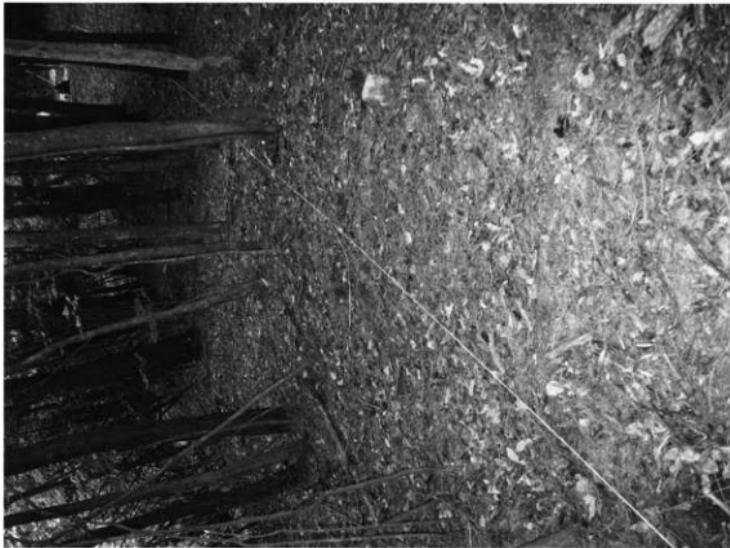
第1表 土器類索表

件文 番号 番号	図版番号	種別・部種	該当区	出土層位	法量(cm)	操作量	粘土	外面	内面	調整
口径	底径	高さ	口径部1/8	砂利細粒少	5Y6/1灰	5Y4/1灰	底板ナデ	底板ナデ	底板ナデ	底板ナデ
1	9 · 10	須磨器・外蓋	白地區第3テラス	流土層	—	—	—	—	—	—
2	9	9 · 10 須磨器・外蓋	白地區第3テラス	流土層	12.0	—	—	—	—	—
3	9	9 · 10 須磨器・外蓋	白地區第3テラス	流土層	—	—	—	底部1/4	砂利細粒少	2.5Y6/1黄灰
4	9	9 · 10 須磨器・外身	白地區第3テラス	流土層	—	9.0	—	底部1/6	砂利細粒少	N5/灰
5	9	9 · 10 須磨器・外身	白地區第3テラス	流土層	—	9.2	—	底部1/6	砂利細粒少、石英中砂少	2.5Y8/2灰白
6	9	9 · 10 須磨器・外身	白地區第3テラス	流土層	—	16.4	—	—	砂利細粒少	5Y7/1灰白
7	9	9 · 10 須磨器・外身	白地區第3テラス	流土層	—	14.0	—	—	砂利細粒少	2.5Y7/3浅黃
8	9	9 · 10 須磨器・外身	白地區第3テラス	流土層	—	7.3	—	底部1/6	砂利細粒少	5Y7/2灰白
9	9	9 · 10 須磨器・皿	白地區第3テラス	流土層	—	—	—	底部1/8以下	砂利細粒少	7.5Y5/1灰
10	9	9 · 10 土器器・坪	白地區第3テラス	流土層	—	6.0	—	底部1/4	長石細粒少	5YF6/6盤
11	9	9 · 10 土器器・坪	白地區第3テラス	流土層	—	—	—	底部1/6	紫母細粒少、石英中砂少	5YF6/6盤
12	9	9 · 10 土器器・坪	白地區第3テラス	流土層	—	—	—	底部1/2	紫母細粒少、長石細粒少	2.5Y8/4浅黃
13	9	9 · 10 土器器・坪	白地區第3テラス	流土層	—	7.2	—	底部1/8	紫母・長石細粒少	5YF7/6盤
14	9	9 · 10 土器器・坪	白地區第3テラス	流土層	—	9.0	—	底部1/4	長石細粒少、石英中砂少	10YR6/6明黃褐
15	9	9 · 10 土器器・坪	白地區第3テラス	流土層	—	8.6	—	底部1/4	紫母・長石・石英細粒少	5YF6/8盤

地文 番号	探査番号	種別・器種	調査区	出土層位	遺存量	胎土	色調			調査 内面	
							口径・高さ	高さ	外観		
16	9	9・10 黒色土器・瓶	B地区第3テラス	流土層	—	—	口縁部1/8以下	黒母・長石・石英細粒少	2.5Y4/1青灰	2.5Y3/1黒褐	ナデ
17	9	9・10 黒色土器・瓶	B地区第3テラス	流土層	6.8	—	底部1/4	黒母・長石・石英細粒少	10YR7/6暗褐	2.5Y3/1黒褐	ナデ
18	9	9・10 黒色土器・瓶	B地区第3テラス	流土層	—	—	底部1/8	黒母・長石・石英細粒少	10YR7/4にぶい 黄褐	2.5Y4/1青灰	ナデ
19	9	9・10 土器器・皿	B地区第3テラス	流土層	—	—	底径1/4	黒母・長石・石英細粒少	7.5YR6/6灰	7.5YR6/6灰	—
20	9	11 痘患器・壺	B地区第3テラス	流土層	—	—	底径1/4	黒母・長石・石英細粒少	10Y5/1灰	板ナデ・圓板ナデ	—
21	9	9・10 痘患器・壺	B地区第3テラス	流土層	—	—	底径1/8以下	砂質細粒少	2.5Y6/1青灰	圓板ナデ	圓板ナデ
22	9	9・10 土筋質土器・長角瓶	B地区第3テラス	流土層	—	—	口縁部1/8以下	長石・石英細粒少、石英中砂少	10YR5/6明灰褐	10YR7/6黄褐	—
23	9	9・10 土筋質土器・長角瓶	B地区第3テラス	流土層	23.2	—	—	黒母・長石・石英細粒少	10YR7/4にぶい 黄褐	10YR7/6明灰褐	板ナデ・指押入
24	9	9・10 土筋質土器・長角瓶	B地区第3テラス	流土層	—	—	口縁部1/8	黒母・石英細粒少、長石中砂少	10YR8/6黄褐	10YR7/6黄褐	ナデ・ハケ目・ナデ 指押入
25	9	9・10 土筋質土器・長角瓶	B地区第3テラス	流土層	33.0	—	口縁部1/8	黒母・長石・石英細粒少	2.5Y6/2灰黃	2.5Y6/2灰黃	指押入・板ナデ・ハケ目
26	9	9・10 土筋質土器・長角瓶	B地区第3テラス	流土層	36.0	—	口縁部1/4	黒母・長石・石英細粒少	10YR7/4にぶい 黄褐	10YR7/4にぶい 黄褐	ハケ目・ナデ
27	9	9・10 土筋質土器・長角瓶	B地区第3テラス	流土層	27.4	—	口縁部1/8以下	長石細粒少、石英中砂少	5YR5/6明灰褐	5YR5/6明灰褐	ハケ目・ナデ
28	9	9・10 痘患器・瓶	B地区第1テラス	流土層	11.8	—	口縁部1/8	砂質細粒少	2.5Y7/1灰白	2.5Y6/1青灰	圓板ナデ
29	9	9・10 痘患器・皿	B地区第3テラス	埋め置土	7.6	—	底部1/2	砂質細粒少	2.5Y7/2灰黃	2.5Y7/2灰黃	ハラ切り・圓板 ナデ
30	9	9・10 痘患器・瓶	A地区開削地	流土層	11.2	—	口縁部1/8以下	砂質細粒少	5Y6/1灰	5Y6/1灰	—



A) 中寺廃寺跡 全景（東より）



B) A地区第11テラス トレンチ2 挖削前状況（東より）

図版3



A) A地区第11テラス トレンチ2 土層断面 1/4 (南東より)



B) A地区第11テラス トレンチ2 土層断面 2/4 (南東より)



A) A地区第11テラス トレンチ2 土層断面 3/4 (南東より)



B) A地区第11テラス トレンチ2 土層断面 4/4 (南東より)

図版5



A) A-B 地区間連絡道 トレンチ1 土層断面 1/2 (南東より)



B) A-B 地区間連絡道 トレンチ1 土層断面 2/2 (南東より)



A) A-B 地区間連絡道 トレンチ 1 SK01 土層断面（東より）



B) A-B 地区間連絡道 トレンチ 2 挖削前状況（北より）

図版7



A) A-B地区間連絡道 トレンチ2 土層断面（北より）



B) A-B地区間連絡道 トレンチ2 土層断面（南東より）

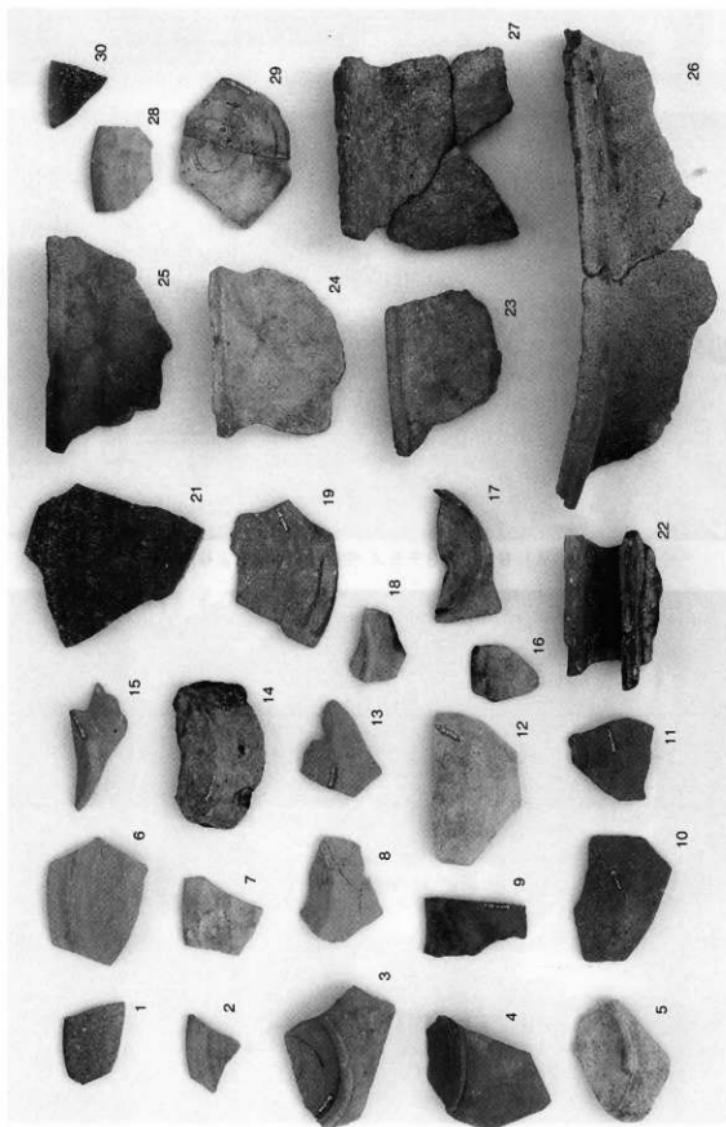


A) B地区第3テラス 完掘状況（北東より）

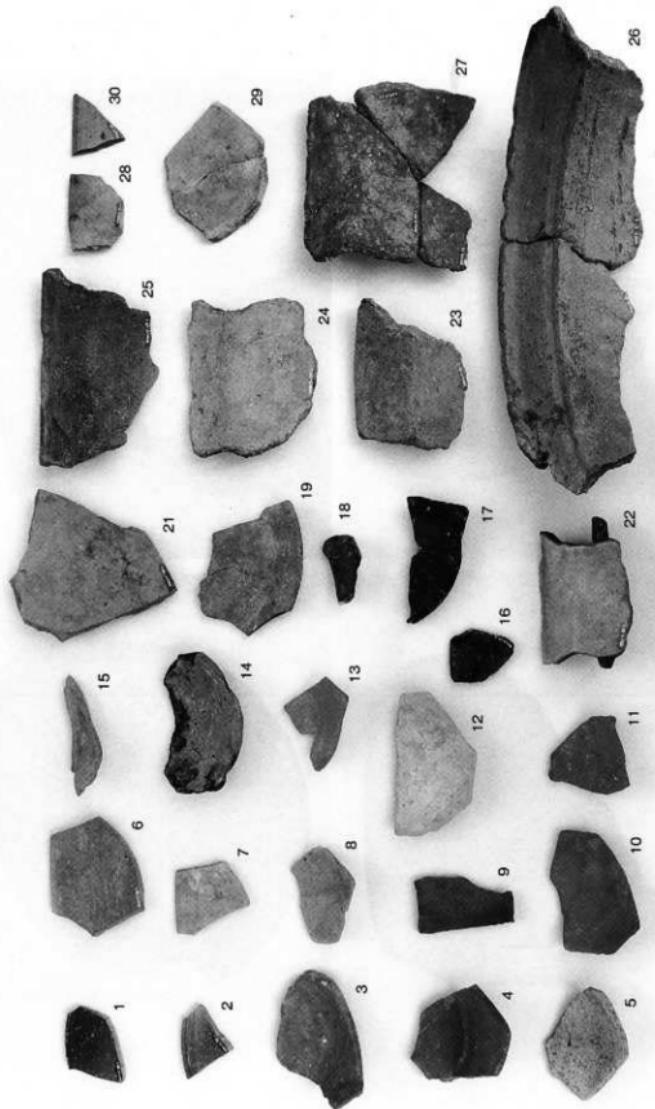


B) B地区第3テラス 完掘状況（南西より）

圖版9



出土遺物 報文番号1～19・21～30 外面



出土遺物 報文番号 1~19・21~30 内面

圖版11



出土遺物 報文番号20

報告書抄録

ふりがな	なかでらはいじあと へいせい22ねんど							
書名	中寺廃寺跡 平成22年度							
副書名								
卷次	2011年3月							
シリーズ名	まんのう町内遺跡発掘調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	中村 文枝							
編集機関	まんのう町教育委員会 中寺廃寺発掘調査室							
所在地	〒766-0202 香川県仲多度郡まんのう町中通875番地 翠南公民館内 TEL (0877) 85-2221							
発行機関	まんのう町教育委員会							
発行年月日	2011年3月31日							
総頁数	目次	等	本文	図版	表	挿図枚数	写真枚数	
42	11		18	11	2	10	25	
所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかでらはいじあと 中寺廃寺跡	香川県仲多度郡 まんのう町造田 3469-2	374067		34度 7分 19秒	133度 55分 3秒	平22.4.21 ～ 平22.11.30	68.9 m ²	確認 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中寺廃寺跡	山林寺院	奈良 ～ 平安		須恵器・土師器・黑色土器・土師質土器		山岳仏教草創期の 山林寺院における 発掘調査		
概要								
国指定史跡中寺廃寺跡（平成20年3月指定）は、香川県仲多度郡まんのう町造田にある大川山（標高1042.9m）の西尾根、標高700m付近に位置する18.8ヘクタールの古代山林寺院跡である。平成20年度までに、A地区では菜園場跡・仏堂跡・塔跡・大炊屋跡、B地区では仏堂もしくは割拝殿であった礎石建物跡・僧房跡、C地区では石組造構を確認している。A地区は仏堂と塔が計画的に配置された中枢伽藍が存在する中心的な地区、B地区は中寺において最も早い時期より大川山信仰に根ざす活動が始まった地区、C地区は平安時代における民間信仰の痕跡が残る地区と考えられる。本年度はA地区第11テラス、A-B地区間連絡道、B地区第3テラス西側斜面について、造構の確認を目的とした試掘調査を実施した。								

まんのう町内遺跡発掘調査報告書 第8集

中寺廃寺跡
平成22年度

平成23年3月31日 発行

編集・発行 まんのう町教育委員会 中寺廃寺発掘調査室

〒766-0202

香川県仲多度郡まんのう町中通875番地 琴南公民館内

電話 (0877)85-2221

印 刷 株式会社 美巧社